



デザインとSNSを通して 楽しくまちを伝える

平石 かなた

(秋田市地域おこし協力隊)

1 秋田市の協力隊になる前ときっかけ

兵庫県明石市で生まれ育った私が秋田市に移り住んだのは、2013年の秋田公立美術大学への進学でした。それまで秋田県には一度も訪れたことがなく、「なまはげ」と「きりたんぽ」のイメージしかありませんでした。大学卒業後にそのまま秋田市内で就職して3年が経ち、合計7年の秋田市生活を経験したのち、転職で兵庫県神戸市に戻ります。ちょうど新型コロナウイルスの流行と重なり、せっかく都会にきたのに外に出ることもできず、高い家賃を払う生活に疑問を持ち始めて、秋田に戻ろうかなと考えようになりました。そのタイミングで大学の同級生から秋田市の地域おこし協力隊の募集を教えてもらい応募しました。地域おこし協力隊の存在は知っていましたが、秋田市で募集があることはその時はじめて知りました。晴れて協力隊に就任したのは2023年5月。活動をはじめてから1年が経ちました。



(就任した2023年5月の交流会で)

2 ミッションと活動方針

秋田市の地域おこし協力隊の仕事は、人口減少・移住定住対策課の業務を職員の方と一緒に進めることです。ミッションは秋田市への移住定住を促進するため、①移住を希望される方向けの移住体験ツアーなどの実施、②隊員それぞれの特技や経験を活かした活動の2本立てです。

移住体験ツアーは、移住希望者の方に、「どんな生活環境を求めているか?」、「どんなことが不安か?」などを事前にリモートでヒアリングをし、ツアー当日までに巡る場所の計画やアポ取りをします。「子どもの教育環境を知りたい」、「学校の見学をしたい」、「起業に向けた補助制度を知りたい」など、お客さまのご要望に沿うようにじっくりとヒアリングをし、当日のスケジュールを一緒に作っていきます。移住希望者は秋田県や秋田市にゆかりのある方がほとんどですが、一度も住んだことがない方も多く、ツアーを行っていく中でこちらが新たな発見をすることも多くあります。

独自の活動は、協力隊応募時に特技として掲げていたSNSでの情報発信を基軸に、デザインや動画編集などのスキルを活かしコンテンツを作成しています。前職が雑貨カタログの編集、その前の職がテレビ局のADをしていたので、今までの経験を活かして、見る人を元気にするような楽しい編集を心がけて作成しています。共に活動している秋田市の協力隊の紹介や市役所主催のイベントなどの告知画像を作ったり、

補助金制度の解説の動画を製作したり、課内の情報発信もしています。役所の情報発信は制度上難しいので、せっかく良い企画をしても告知が十分に行き渡らない場合があるので、課題のひとつとして取り組んでいます。



(秋田市の魅力の発信や
問題に対しての解決などをSNSで発信)

3 協力隊1年目

6年間会社員として勤めてきたので、行政との仕事ははじめてで分からないことだらけでした。今まで役所に来るとしたら住所変更と印鑑登録くらいだったので、協力隊予算の使い方やプロポーザル方式で委託先の決定をすることなど、補助金制度についても学ぶことがたくさんありました。これまでと異なる環境は大変なこともあります。新しいことを知ることで視野が広がったとポジティブにとらえることもできます。協力隊に就任して1年目はとにかくイベントがあれば顔を出し、勉強会があれば参加し、イベントの運営に加わりと、顔見知りを増やすことを心掛けました。秋田市は県内では一番大きな自治体なので、人口が多いのですが、想像以上にすぐに知り合いの知り合いになれます。一般的に、田舎（地方）ほど外からの者との深い人間関係の構築が難しいと言われていますが、たくさん知り合いができるのは「秋田市の魅力の一番」と言ってもいいところかもしれません。

また、ABSラジオで、キャミソウルコバヤシさんがパーソナリティーを務める「エキマイク」や、「シンチカララジオ」のコメンテーターとして出演しています。この番組では、秋田県内各市町村の地域おこし協力隊にお会いし、話ができるので、毎回「学び場」となっています。引き続き2024年度も出演予定ですので、聴いていただけたらうれしいです。

4 フリーペーパーの発行

SNSの発信を続けていると少しずつフォロワーが増えて、声をかけてくださる方も増え、今までコツコツやってきた結果が出始めたのだととてもうれしく思う反面、私の発信は、届く範囲が限られていることに気がきました。少子高齢化が進む秋田市でスマホを使う人は限られていますし、自分よりも若い学生の世代にも何か届けたいと思うようになりました。そこで、秋田市文化創造館に「リソグラフ」という印刷機があることを知り、2024年からフリーペーパーを発行することにしました。紙という超アナログ手段ですが、公共の場所にあって誰でも目に入って、物として手にとることができ「秋田市でしか手に入らない」ローカルな特別感もあります。2か月に1度のペースで1000部を印刷し、秋田市内のコミュニティセンターや図書館、学校、公共施設、カフェなどの店舗に配置しています。掲載している内容は、秋田市での何気ない暮らしや、思ったことなど、顔も名前も知らない誰かを友だちに見立ててお手紙を届ける気持ちでイラストと文章を書いています。その中で、「ニッチでグッドで賞」という町で見つけた私のお気に入りの連載をしています。

SNSの広がりにより情報が溢れる昨今ですが、手紙というスローなコミュニケーションツールをあえて選び、継続していくことで地域に

定着し、同じようなことをしてくれる人が一人でも現れて、手紙交換ができるようなまちなになると素敵だなと考えています。片面にイラストや写真などを掲載し、読んだ後も部屋に飾ったり、ラッピングに使ったりと楽しめるような工夫もしています。



(ラジオの出演)



(2023年7月のプチ★ネオレトロ盆踊り
ワークショップの様子)

5 秋田市における課題と解決

地域おこし協力隊を採用している多くの過疎地域と違い、人口規模が比較的大きい秋田市ですが、2005年の市町村合併後はじめて2023年11月に30万人を切り、人口は減少する一方です。国全体をみても、人口が増える事は現実的

ではありません。急激な減少を緩やかにする事、都市部への人口流出を減らす、地方移住を促進する事しかできないと思っています。ただ、今の秋田市に住む高校生、大学生に秋田市から出て行かないで！と抑止することは考えていません。もちろん地元を愛して住み続けるのが理想ですが、人生は自由なので、色んな都市や田舎、地域で暮らしてみることでフィットする地域を選んで住み続けることができれば一番良いのではないかと思います。秋田市は大学が多いので県外から若い世代が集まるチャンスを持ち合わせています。秋田に来るきっかけが学業であっても「このまちがいいな」と思える何かを持ち帰ってもらえたら、一度外に出て戻ってくる可能性は大いにあると思います。若者にやさしいまちづくりがこれからできるのかが、とても大事だと考えています。たとえば私が学生として秋田市に暮らしていた頃から、現在も特に不便に感じているのが交通です。冬になると雪が積もるので自転車が使えないため、バスなどで移動するのですが、交通費が高すぎるのと時間に限りがあるので移動が大変です。そこで地元の方は「車を持てばいいではないか」、「車がないと生活できないよ」と言うのですが、今の不景気な時代、若い人が車を所持するのは経済的にとても厳しいです。現実的にすぐに改善できるものではないですが、そのような視点を持って政治に参加してほしいと伝えたいです。あとは「このまちいいな」と思えるのは、住んでいる人が楽しそうに暮らしていることです。

「秋田には何もない」という口癖は今すぐにやめた方がいいです(笑)。いきなり「地元最高！秋田LOVE！」とまで言わなくても「穏やかな暮らしができるしあわせ」、「まちに素敵な人がいる楽しさ」を感じるだけでも地域の良いところが少しずつ見えてくるのではと考えます。

SNSで発信をする上で心がけているひとつが、秋田市で暮らす日常の中の「ちいさなしあわせ」を見てもらうことです。大きなテーマパークが無くても、ものすごい観光地が無くても暮らすまちとしての価値は必ずあります。



(フリーペーパー)

6 今後の活動

地域おこし協力隊としての2年目がスタートし、活動の幅が拡がり移住者交流会を実施できるようになったことから、これからはもっと秋田市の方と交流を深めていきたいと思っています。特に今年度は若い世代と関わっていききたいです。1年間活動してきて、秋田市に暮らす先の長い若い人の考え方や、現状を知っていくことがこの先の活動において大事なのではないかと考えるようになったからです。

また、googleマップのリスト作成をして、「秋田市は何もなくていい！」を可視化していきます。昨年度に移住ツアーに来た方や、観光で秋田市に訪れた方に個人的にシェアをしたところ、とても喜ばれました。

今後は、今までやってきたデザインや編集の力を活かして発信を続けるとともに、秋田市の身近なおすすめスポットを秋田市に住んでいる人にも、外から訪れた人にも様々な形で伝えて、秋田市の魅力を内外にどんどんアピールしていきたいと考えています。

<担当者から一言>

秋田市では、平成29年度に「地域おこし協力隊制度」を導入以降、現在まで9名の隊員が活動してきました。現在活動している隊員は、大きく2つのミッション(役割)を担っています。

1つ目のミッションは、「移住定住コーディネーター」としての活動です。本市の地域資源や、特徴を活かした「移住体験ツアー」や「移住者交流会」等を企画・実施しているほか、移住希望者向けの「お役立ち情報」を発信しています。

2つ目のミッションは、隊員自身の経験やスキルを活かした活動です。毛利隊員は、自身の「子育てママ」としての経験や視点を活かし様々なイベントを開催しています。また、平石隊員は、若年層や単身者向けのイベントを企画・開催し、その様子を独自の視点で切り取り、得意とするSNSで市内外に広く発信しています。このようにそれぞれの隊員がスキルを存分に活かした活動を行っています。

制度の導入以降、隊員のこうした活動や発信を目の当たりにするなかで、改めて、日常のなかにたくさんの「魅力」や「資源」が溢れていることに気付かされます。地域に暮らす私たち一人ひとりが、このまちの「魅力」や「価値」に自信と誇りをもって暮らし、内外に発信していくことが大切なのだと学ぶ日々です。

引き続き、それぞれの隊員が経験やスキルを存分に活かせるようサポートすることで、本市の魅力や秋田市で暮らす「ワクワク感」を市内外に広くPRしていきたいと思っています。

(秋田市企画財政部

人口減少・移住定住対策課 玉尾 由享)